

地域の歴史遺産を守る

水害で被災した史料のレスキュー活動紹介

佐用町の水損史料レスキュー活動の体験から

神崎郡歴史民俗資料館

村上 由希子

はじめに

近年、日本国内をはじめとして、台風や水害などによる被害が各地で起こり、残念ながらその被害状況も甚大なものが多くみられます。

二〇〇九年八月には、台風九号による水害が兵庫県佐用町で発生し、多くのものが失われてしまったことは皆さんの記憶にも新しいのではないのでしょうか。

水害で被災したものには、地域の歴史資料も数多く含まれ、古文書や村絵図、民具や農具などの歴史資料をはじめ、役場の行政文書などがありました。

災害時において、まずは「人命や生活のライフライン確保」が重要になります。しかし、被災した歴史資料のように、地域の中で大切に守り伝えられてきたかけがえのない記録は失ってしまうのではなく、救出することで守りそして未来へと繋ぐことができるのです。

今回は、この佐用町における水害

で被災した資料を救出するレスキュー

作業活動をおして、自然災害から地域の歴史遺産を守ることがいかに大切なことであるかを見つめることができればと願い、これらの活動についてご紹介させていただきます。

被災した史料のレスキュー活動

兵庫県には、阪神・淡路大震災後の被災歴史資料を保全する活動を行ってきた、「歴史資料ネットワーク」（以下史料ネット）という、歴史研究者を中心としたボランティア団体があります。

佐用町の水損史料レスキュー活動においても、この史料ネットの方々による献身的な取り組みが被災直後から行われ、被災地での巡回調査や史料救出、そして史料修復が進められてきました。私はこの史料修復が行われていた現場で作業に参加し、史料ネットの活動に触れることができ、修復方法をはじめ被災史料の実態、災害が起こるといことなどが、様々なことを学ぶことができました。

そしてこの体験を中心に記します。

まず、被災地で水損した史料は、自然水だけではなく、生活排水に浸かり被害を受け、カビや臭いが発生します。そして時間とともに乾燥が起こり、これらの史料は紙の変色や変形を起こしてしまいます。それゆえ、早期に廃棄される場合が多く、被災地に入り直面する現実として、史料は廃棄されてしまった後であるということが非常に多かったそうです。早期廃棄に至る要因としてはやはり、「水に濡れてしまった紙史料はもう使えない」という思いではないのでしょうか。

しかし、この史料修復方法は、「濡れた史料を元に近い姿に戻す」ことが「応急的に」「誰にでもできる」保全方法になります。

水損史料の修復作業

史料修復は、大きく分けて①クリーニング②補修の作業になります。

(1) クリーニング

水損史料は、濡れたまま乾燥したため何枚も重なり固着しています。そこで、まずはじめに、この固着した古文書を一枚・一枚剥がしてからクリーニングを行います。次に、この一枚・一枚の史料の下に不織布を敷いて、エタノールを散布し殺菌し

ます。(写真①) このとき、できるだけシワなどは手でのぼし、古文書の折れなども手で直します。この消毒を終えた史料の上に不織布を被せ、水道水で水洗いを行います。この水洗いでは、古文書についているゴミを洗い流すもので、ハケを利用し、水を切りながら流します。(写真②) 流し終えた史料は作業台へ移し水切りを行います。

作業台にはあらかじめ新聞紙を敷き、その上で作業を行います。まず史料表面の水分をハケで水切りし、次に新聞紙を利用して、史料の水分をあらかじめ吸い取ります。(写真③) 最後は、キッチンペーパーを使い、手の重みをかけながらゆっくりと吸い取り、史料を手で触っても水気が手につかない程度まで吸い取ることができると、史料表面の不織布を取り外し陰干しを行います。(写真④)



①アルコール水で消毒



②水道水で洗い流し



③作業台でハケを利用し水切り



④キッチンペーパーなどで吸水

(2) 補修

クリーニングを終え、乾燥させた史料で、破れや虫損などにより補修を必要とするものは、史料補修を行います。

はじめに、史料の補修箇所を確認したのち、史料を裏返し、補修箇所より一回り大きいサイズの和紙を用意します。和紙は、手でちぎり、周囲をケバ立たせ利用します。(写真⑤) この和紙は、洗濯糊を水で薄めた糊を筆で付けます。そして史料の



⑤和紙の周囲をケバ立たせる



⑥補修穴に和紙を貼り付ける

補修穴に和紙を貼り付け補修は完成します。(写真⑥)

史料修復の作業を終えて
このようにして、被災史料の修復作業は続き、元に近い姿を取り戻していきます。ここでは、原稿の限りもあり簡略化した形ではありますが、大まかな修復作業過程をまとめました。

この水損史料の修復作業やレスキュー活動については、史料ネットによる講習会や各シンポジウムなどで教えていただいたことがあり、二〇〇八年に歴史民俗資料館で開催した連続講座②においては、この修復ワークショップを町民の方と一緒に行いました。しかし、実際の現場で実践することは実習とは違い、その現場で整う作業環境や実際の水損史料に対して柔軟な対応をする順応性が必要でした。

またこれらの修復方法は、決まった形があるのではなく、被災地での作業を続けてきた史料ネットの活動により改良が重ねられてきた努力の証しでもあります。そしてまた、これらの作業には、現地自治体の職員や整理作業員の方々も携わり被災地での修復活動が行われていました。自らも被災した現地の方々、この

活動に取り組む姿から、「地域の史料を救いたい」という強い気持ちを感じ、私たちのような外部参加者にできることは、少しでも現場の負担が軽減されるお手伝いなのではないかということでした。

私が活動に参加したことで、この体験を活かすことは、活動で学んだことを福崎町に持ち帰り、一人でも多くの方にこれらの活動を知ってもらうことでした。情報を知り、取り組みを理解いただくということは、実際にこのようなことに直面したときに、現地においての初動体制を早期に整え準備・対応できる自治体づくりであり、「平時における取り組みを怠らず災害に備える」日常からの防災対策が重要になるのではないかと感じました。

おわりに
私がこれら史料ネットの活動に興味を持ったことの一つが、私自身が阪神・淡路大震災を経験したことでした。まだ中学生だった頃に感じたことは、ごく単純なこと、水や電気、ガスの使えない生活の不自由さ、そして何より突然奪われる尊い命。つまり冒頭述べた、災害において第一優先される「人命と生活のライフライン確保」の必要性でした。

しかし、これらが最優先される被災地において、史料ネットの活動は地域の歴史資料を守るといったものでした。

時を経て、私は現在資料館に在職し、地域の歴史や文化を肌で感じ、そのかけがえのなさともぐもりに触れています。

災害において最も優先されるものの大切さと、後回しにされてしまうもののがえのなさ。この両面を知った今だからこそ、史料ネットをはじめとする、被災地での史料レスキュー活動に興味を持ちその大切さを痛感しています。

もうまもなく、神戸では震災から十五年目の朝を迎えます。

今回ご紹介させていただいた、佐用町における水損史料レスキュー活動は、私自身の被災体験と重ね合わせ考えることもできました。

この貴重な体験を、今回この場所をお借りして記す機会に恵まれたことに感謝し、次また新たな巡り合わせがあるのではないかと希望を感じながら、結ぶことができそうです。

(参考文献)

『水損史料を救う 風水害からの歴史資料保全』松下正和・河野未央

二〇〇九年 岩田書院

被災地において活動を続けてこられた松下正和氏、河野未央氏をはじめ、被災地自治体職員や住民の方々、これらの活動に尽力されている全ての方に敬意を表します。

水損史料Ⅲ「展示の案内」

「水損した歴史遺産を救う」

—2009台風9号豪雨被災古文書を中心に—

五月五日（水・祝）まで、兵庫県立歴史博物館では、今回ご紹介した佐用町を中心に行われた水損史料レスキュー活動や救出された資料を紹介する展示が開催されます。

ぜひこの機会に、活動の様子や実際の資料などをご覧ください。

会期 平成二十二年

五月五日（水・祝）まで

会場 兵庫県立歴史博物館一階

歴史工房室（無料ゾーン）

【姫路市本町六十八番地】

観覧料 無料

主催 兵庫県立歴史博物館

歴史資料ネットワークなど

問合せ 兵庫県立歴史博物館

☎079-288-9011

クラブ紹介

文化の向上とは？

公民館（絵画）クラブ

山本泰毅

◆絵に出合ってもう四十数年、小学生の頃からそのまま、担任の先生が絵の先生であった。その後、今まで私の絵の先生であった。私の絵は自己流である。でも初めて今はプロの先生にお世話になっている。プロの先生でも満足な作品はそう出来ないと言われる。まったくその通り何十年これといった物は描けた事がない。少しも上達した様に思えない。実は今悩んでいる。習い事とは実に奥が深い上が見えない。習い事とは全てそういうものらしいが今更自分の無力さがわかる。そして同時に絵というものの深さを痛感する。

◆絵を描いていると物の観方が変わる。描かない人が画題物を用意するとき草花の枯れた葉を取り除く。私には枯れた黄色がかつたその色が邪魔にならない色数が三色は増える。又変化が出る。一面青い空、これも美しいだろうが白い雲、黒い雲、赤い雲があるほうがいい、絵がうごいている。



◆白い壁の剥がれ落ちた倉を探して歩く。以前作り酒屋を描こうとその家にお願した。しかし断られた。その建家は壊れかかり荒れ果てていた。その為である。仕方なく自分の事務所があるビルの屋上からその屋敷を描いた。その絵は賞を受けた。もう十九年前のこと、審査の先生の批評を後で聞いた「このレンガの煙突の曲がっている所が実に面白い」と言われたら嬉しい。そんな所を褒められたのが意外であった。絵とは写真ではない、自分流で自由に描けばいいのだから、でも習い事には全て基礎がある。それぐらいは誰でも解る。あのピカソも元は今の様な絵で

はない、今の絵を発明した。蟬は殻から抜け出して楽しそうに鳴いている。私は未だ脱皮できずもがいている。でも奥が深いから面白いのである。

◆おもしろくないのが今の世相。官僚、政治、政治家にもいい絵を描いてもらいたいものだ。世相といえは今の時代子どもを育てられない親が多いように思う。人を動物に例えるのは語へいがあるが犬を訓練するのは若いうち。言うことを聞かなければ叱る。うまくやれば物をやる。片手にムチ、片手に飴。小さな子どもは善悪がわからない、口うるさくてもいちいちその都度教えなければならぬ。しかしそれは、中学生の頃まで、後は黙って見守るしかない。その年になれば善悪は既に備わっている。何が大事か、何をしてもよいが要はその責任を取れるかということとであろう。もう大人ということを持たせなければならぬ。愛情を持って厳しく。私はそう育てられた様に思う。

◆私の尊敬する一人、中国三国志で蜀の劉備に仕えた、諸葛亮（孔明）が残した言葉「我が心秤の如し」秤のごとく両方つり合う様に、物事全て公平に判断しなければならぬと

言っている。自分を中心に物事を考える前に半ば相手の気持ちを察すれば正しい答えがでるのではないか。結婚して二人も子どもが生まれるともう一人前と勘違いしている親が多い。この時点でもう発展はない。習い事でそれはよく解る。なかなか一人前にならない、生きていくことは難しい、一生勉強ということか。こういうことを考えさせられるということが文化の向上を推進することなのだろうか。と偉そうなことをいろいろ言ってきた私のだが・・・」。

福崎町児童合唱団 団員募集中!!

福崎アルコバレノ児童合唱団

長谷川 隆 子

福崎アルコバレノ児童合唱団は、二年前結成しました。以前から福崎町には、何故、児童合唱団がないのだろう。児童合唱団があればいいなという想いで結成しました。

「アルコバレノ」は、イタリア語で「虹(にじ)」です。

にじ色にキラキラ輝く子ども達の歌声を、福崎町に響かせ続けたいという思いで名付けました。二年前に

結成したばかりで、まだひよっ子ですがパワー全開で、楽しく頑張っています。



今までの活動としては、春と秋の「福崎町公民館クラブ発表会」老人ホーム「泉の杜」夏祭り慰問、エルデホールでの「ファミリー・リトルコンサート」出演、「ふるさと文化祭」出演させて頂いています。合唱だけでなく、以前オペレッタ「三匹の子ぶた」をしました。只今、オペレッタ「シンデレラ」の練習に奮闘中です。

子ども達のパワー・今は七人なのですが、その団体の中の優しさや気持ちを含ませ、伝えようとする表現力の、大人と違った自然さ、素直

さ、純粹さに感動します。

にじ色にキラキラ輝く、福崎っ子達、みんなのパワーで、福崎町をにじ色の元気な歌声であふれた町にしようよ!!

月に三回土曜日午前十時から午前十一時半、文化センター大ホールで練習しています。一度、遊びに来て下さい。

クラブ活動によせて

ちぎり絵クラブ

橋 本 富貴子

私が始めてちぎり絵に出会いましたのは、今から四十年前、病気がなりに、今は亡き中野はる先生の展覧会を見たのがきっかけでした。

和紙をちぎってその風合いを生かした素朴で温か味のある美しい作品に触れ感動致しました。そのときの印象は今でも忘れることが出来ません。その後、文化センターにちぎり絵クラブが出来、先生を講師として、月一回の稽古を楽しんでいます。

当時ちぎり絵はまだ珍しくて、福崎はもとより神崎郡内、生野町、姫路方面からも会員がありました。後年各地に教室が増えましたのと高齢化も伴い、ただ今は十名の会員が毎月一回第三土曜日の午後一時から四

時まで、それぞれ好みの教材によって楽しく稽古が続いております。

自分は絵心が無いから駄目だと言われる人がありますが、無くても貼って見たいと思われる気持ちがあれば六十の手習い七十の手習いでも上手になれます。一つの事を努力して頭も使い指先を動かすことは、老化防止にも効果があると言われています。

コミュニケーションの場として笑うことも多くストレス解消にもなるようです。クラブの年間行事として秋の文化祭には、日頃の作品を展示発表させていただくことになっています。私たちは新しい方の入会されるのをお待ちしております。

